

平成 29 年 4 月 3 日(月)15:30～16:30

新任教員 FD 研修

「信州大学で充実した教育・研究生活を送っていただくために」

<本日のプログラム>

1. 信州大学の教育について
理事(教学担当)・高等教育研究センター長 平野吉直

2. 高等教育研究センターによる教育・研究のサポート
 - 2-1. 高等教育研究センターの紹介(副センター長 加藤鉦三)
研究支援と教育支援
教学関連の第三期中期計画

 - 2-2. 各担当紹介(センター専任教員 李 敏・矢部 正之・加藤 善子・古里由香里)

※配布資料一覧は裏面にあります。

<配布資料リスト>

●1つ目のポケット

- ◆プログラム
- ◆高等教育研究センターのあらまし/FDのご案内

●2つ目のポケット

- ◆資料 No.1 高等教育研究センター教員の職掌のご紹介
- ◆高等教育研究センターNews Letter

●3つ目のポケット

- ◆資料 No.2 授業アンケートの全学共通項目について
- ◆資料 No.3 シラバス作成及び今後のシラバス点検に関する説明
- ◆資料 No.4 「新入生調査 2015 年(JFS2015 信州大学)」報告書

●4つ目のポケット

- ◆資料 No.5 国立大学法人信州大学教員業績評価・給与査定制度(全学教育機構基準)抜粋
【平成 28 年度参考】

●5つ目のポケット

- ◆4月17日(月)新任教員向け eALPS 研修会について(通知)

●6つ目のポケット

- ◆アンケート

高等教育研究センターのご紹介



副センター長 加藤 鉦三

■当センターがやりたいこと

個々の授業で『学びの手ごたえ, 学びの実感』

→ 個々の授業で「やればできる」を体験

→ 新しい環境でも「やればできる」と思える

→ 「信大の卒業生は『自分はやればできる』ということを知っている」

文科省が何と言おうが、これができていれば問題なし

■当センターがやりたいことを実現するために

「信大の卒業生は使える」

これを実現するためには、学生ががんばって勉強できるよう、先生方にいろんな
お願いをしなければならない

↑

センターが先生方の**信用**を得なければならない

■研究支援

- ・ 科研費申請書の書き方支援

通る書き方, 落ちる書き方があります (審査員談)

- ・ 教育実践をセンター員と共同研究に

センター員とシラバスを検討, 実践したことを発表して業績に。研究費支援も検討中。

■教育支援

- ・ FD 活動

「学びの手ごたえ, 学びの実感」を大切にする授業デザインを中心に

- ・ eLearning の活用
- ・ 学生調査データのフィードバック
- ・ 教育方法や学生との接し方などのワークショップ

■教学関連の中期計画

①個々の授業で『学びの手ごたえ, 学びの実感』

⇒ ②「信大の卒業生は『自分はやればできる』ということを知っている」

①を基盤に, ②に収斂するように舵取り

計画達成のインフラは, 先生方の「やってみたら効果があった/達成感があった」

■ポリシー

- ・ 学生の満足感なくして教育効果なし

- ・ **教員の満足感**なくして学生の満足感なし

李敏の仕事のご紹介

高等教育研究センター 李敏
limin@shinshu-u.ac.jp



李敏 (LI MIN) とはどんな人？

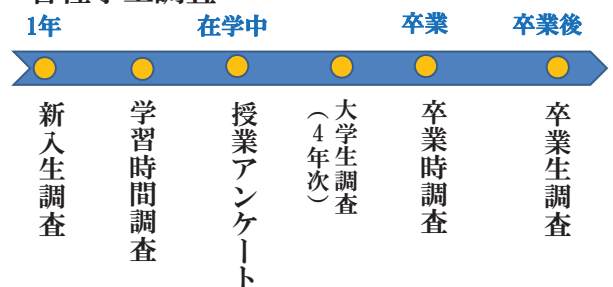
- 名前：李 敏 (りびん)
- 英語表記：Min LI
- 信大における登録名：LI MIN
- 日常生活で呼ばれている名前：
鄭さん、逸馨さんのお母さん
⇒名前とアイデンティティ

李敏 (LI MIN) とはどんな人？

- 学部：日本語専攻
(英語が得意だったのに……)
 - 現在の仕事：
 - 教育社会学・高等教育を中心とする。
 - 社会調査(統計)の手法を多用する。
(数学が苦手だったのに……)
 - 英語を使う仕事も増えた。
(日本に留学に来たのに……)
- ⇒ 人生って、不本意の連続です！
不本意って、悪いこと？

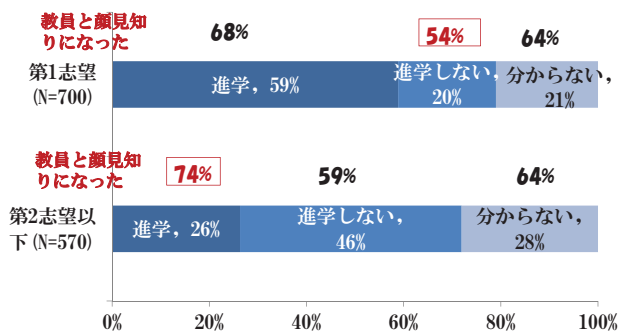
李敏の仕事

各種学生調査



- ① 信大・あなたの学部にごどのような学生がいるかを知る。
- ② 学生がどのように勉強するか、大学生活を送るかを知る。
- ③ 教員としてどのように学生に接するかを考える。

志望順序×再進学希望× 教員との関わり



「大学生調査2014年」4年生対象，2014年11月

先生方が信州大学で充実した教育・研究生生活を送っていただけるように、ご協力いたします。

矢部 正之 (YABE, Masayuki) とは、何者？



- ⇒ 元々の専門は、原子核物理（核反応理論）
- ⇒ 医学部にもいました（保健科学と物理学・人間工学）
- ⇒ 高等教育での専門分野は、高等教育における ICT（情報通信技術）の活用

このような経験から、現在の研究課題・関心事は、次のようなことです。興味のある方は、いつでも声をかけてください。（メールは、yabe@shinshu-u.ac.jp）

★学修支援システム【e-Learning センターと共に】

- ⇔ LMS（学習管理システム）や電子ポートフォリオの活用とその効果
- ⇔ モバイル（携帯・スマートフォンやタブレット）を利用した双方向性促進
- ⇔ 画像（動画）の活用（遠隔授業、e-Learning, 反転授業）

★教育ビッグデータ（評価・分析とそれに基づく施策提言）

- ⇔ 学修支援システムからのデータ収集
- ⇔ IR（Institutional Research）への活用

★地域との連携【高等教育コンソーシアム信州と共に】

- ⇔ 大学間連携の推進（教育・人材育成、地方創生）



**利用可能な様々な資源を効果的に利用し
教育に活かす！**

私の専門領域は、**初年次教育**です。

全学のFD（特にアクティブ・ラーニング推進や、学生を勉強させる授業デザインなどのFDとコンサルテーション）、信大版の初年次セミナー「**大学生基礎力ゼミ**」の運営と支援、**学習支援プログラムの体制構築**（現在は主にライティング支援）、の3つが主な業務です。

…そして会議にたくさん出ています。こんなに毎日何時間も座っていたら、○になってしまうのではないかとマジで心配した時期がありました（笑）。

初年次教育は、

みんなでやろう！

励ましあって元気にやろう！

知恵を出し合ってやろう！

がキーコンセプトです。学生のやる気が最も強い入学直後に、学生と正面から向き合って学生の努力と能力を引き出せる、とてもやりがいのある仕事です。仲間が多いとはまだまだ言えませんが、みんなががんばっています。先生方におかれましても、

学生にもうすこしがんばって勉強してほしい！

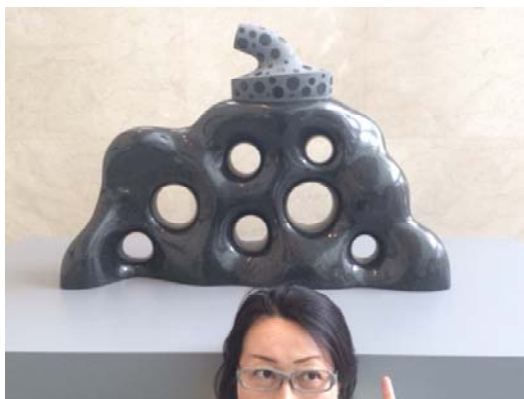
授業の効果を下げずに、授業準備に使っている時間を研究（や家族サービス）にまわしたい！

学生同士で学びあえるような課題をつくりたい！

でもレポートは（コピペせずに）一人で真面目にとりくんでほしい！

そして・・・教育法や教育改善についての論文を発表したい！

といったご要望がございましたら、お気軽にお声かけください。先生のティーチング・スタイルを聞かせていただきながら、無理のないソリューションをご提案させていただきます。先生方の研究・教育生活のパートナーとして、末永くお付き合いください。



神戸市出身／お笑いではツッコミ担当、でも余裕で天然ボケです。／阪神タイガースファンですが、巨人ファンの先生にもFDしに行きますよ！／大河ドラマ好き。昨年は上田城跡・松代城跡はもちろん、大阪の真田丸跡にも行きました。／草間彌生ファン。数か月に1度は松本市美術館でエネルギーをチャージします。／好きな作家は、笠井潔と綾辻行人と大江健三郎と三島由紀夫。／月に1度は海を見に行くのが楽しみ。／どこにでも歩いて行くためか、町中での目撃情報多数。

所属：高等教育研究センター 助教

名前：古里由香里

連絡先：furusato@shinshu-u.ac.jp 内線(7335)



□仕事について

- ・専門は社会学で、特に統計学を用いた計量分析を使って
 - ・社会格差と不平等（職業、社会関係資本について）を、研究しています
- ・高等教育研究センターでは、これらを用いて
 - ・「計量的測定」と統計学を用いた「データ分析」を行っております
 - = 「学生データの収集」と「そのデータの整理・分析・結果の提供」が仕事です
- ・統計学って、確実に当たるものなのか？何かを予測するのか？
 - ・と、よく言われますが、残念ながらそこまで魔法の手段ではありません
 - ・確率論をベースに、「AだとBになる可能性が非常に高い」という全体的な傾向を示すだけ
 - ・だから必ずそうなるわけではない、例外もある
 - 先生方が学生を直接「見て」、話を「聞いて」、「指導」する、ことは不可欠。
- ・ですが！そのお手伝いをすることが可能です
 - ・個別の実体験をもとにして全体を把握することは大変な労力
 - ⇒この部分を IR (Institutional Research) を活用して、簡略化
- ・具体的には、
 - どういう学生がサポートを必要とするか、
 - どのような指導・支援が成績（GPA）をあげるか、
 - どうしたら卒業するときに、達成感や自信をもって、社会に出られるか、など
 - これにより、全体傾向⇒個別指導、に簡略化
- ・なので、調査ご協力のほど、お願いします！
 - ・これらの基礎をなすのは、先生方にもご協力いただく各種学生調査です
 - ・ご負担だとは思いますが、その結果は最終的には先生方にも還元されます
- ・また、学生や授業などデータ分析のご相談や共同研究も歓迎しております。
お気軽にぜひお問い合わせ、または機構4階南の高等教育研究センターまで。

高等教育研究センター

Research Center for Higher Education

Newsletter

No.034

目次

2017.3

- 平成27年度学内版GP成果報告
神 勝紀 教授
平林 公男 教授
小西 哉 教授
- お知らせ
- スタッフからひとこと



信州大学 | 高等教育研究センター
SHINSHU UNIVERSITY

平成27年度学内版GP成果報告 vol.6

前号に引続き、平成27年度学内版GPに採択された取り組みをご紹介します。

また、3月13日（月）に平成29年度学内版GPの応募者ヒアリングおよび選考が行われました。厳選なる審査の結果、平成29年度学内版GPの採択件数は11件となりました。

審査員の皆さま、応募者の皆さまにおかれましては、甚大なご協力をありがとうございました。

★平成29年度学内版GPの詳細は高等教育研究センターのホームページにてご覧いただけますので、ご興味のございます方はぜひともご覧ください。

<http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/rche/approach/campus-gp/>

アジア圏学生のためのボーダーレス畜産教育プログラム

～学生の内向き志向の打開を目指してPart 3～

農学部 神 勝紀 教授

このプログラムの目的

我々は食料生産科学科（改組のため現在は別組織）の学生の目を海外に向けさせるために、これまでに“学生の内向き志向の打開を目指してPart1及び2”を実施し一定の成果を上げてきたが、実施規模の小ささから学生全体に対するインパクトは十分ではないように思われた。そこで今回は海外の協定校、タイのスラナリー工科大学、バングラデシュ農業大学およびインドネシアのジャンピ大学から学生を4人ずつ、教員を1人ずつ、すなわち15人を一度に招聘して「海外の雰囲気」の中で授業や交流を行うことによって“学生の内向き志向の打開”をはかった。

各国固有及びアジア圏共通の課題について理解を深め、共同研究のヒントも得られた。質問は教員だけでなく学生からも活発に行われた。

文化交流：英語しか通用しない環境であったが、教員主導の交流会だけでなく、学生だけで計画・実行した交流会も開催された。これには交流サークルや海外畜産実習（H25年度学内版GP）の参加学生らの助力が大きかった。参加者は合計60名超であり、学生間のボーダーレス化は順調に進んでいる。

実施内容とその成果

授業・実習：招聘学生と本学科学生は授業・実習・ゼミを合同で受講した。授業は主として英語で行ったが、外国人受講者が多かったため違和感がなく、本学科学生も自然に英語で質問することができた。授業で積極的に質問する日本人学生は元々少ないが、招聘学生が質問するとそれに釣られて質問するという好ましい傾向も見られた。

国際シンポジウム：招聘教員とともに「東南アジア圏国際畜産学シンポジウム」を開催した。約60名の参加者は、



長期的な成果

ネットワーク形成：本取り組み以降、このネットワークの範囲内だけでも以下のように活発な交流が行われている。来日：教員2人（1ヶ月及び4日間）、学生6人（10日間）、大学院生1人（3カ月）。訪問：教員2名（1週間）、学生2人（4カ月）。

スタッフ・ディベロップメント：活発な交流のためには職員の協力は必須である。農学部ではこれ以外にも活発な交流が行われていることもあって、ノウハウの蓄積とスキルの向上が見られ、種々の手続きが円滑に進むようになっている。

今後の課題

英語による授業：国際交流を活発化させるためには英語力は必須であり、そのためにも一定数の授業は英語化する必要があると思われる。今回の招聘学生の多くは本学大学院への進学を希望していたが、授業が英語化されていないために断念した。また本プログラムとは異なるが、H28年度に農学部生160名を対象行ったアンケートでは、英語による授業を希望しない学生は35%しかいなかった。

Now, the ball is in our court.

本プログラムは、実施規模の大きさから、学内版GPに加えて、日本学生支援機構海外留学支援制度および農学部国際交流事業からも支援を受けた。記して謝意を申し上げます。

「グローバル人材育成のための主体的学修法の導入と成績評価の厳格化を基礎とした学生の自己効力感の向上に向けたカリキュラムシステムの構築」

繊維学部 平林 公男 教授

この取り組みの目的は

「英語を的確に理解（聴・読）し、英語で迅速に対応（書・話）できる実践的コミュニケーション力を有する技術者を育成する学部及び大学院（修士・博士）のカリキュラムの構築」を最終目的としています。そのために、特に学部高学年における主体的学修習慣の定着と、学習意欲の維持方法に関する取り組みが主なものになります。

この取り組みの方向性は

最近、閣議決定された《21世紀の日本の復活に向けた21の国家戦略プロジェクト》、《新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて》が目指すグローバル人材育成を担う取り組みと一致しています。

この取り組みの6つのポイント

1. 英語の実践的スキルを重視した学部から大学院までの英語力向上のためのプログラムです。
2. 達成度評価、教育効果検証に、実践的英語スキル判定の世界標準「TOEIC」を使い、評価の客観性を担保しています。
3. 信州大学理系4学部の1年生または2年生にTOEIC-IP試験の受験を義務づけ、スコアを成績に反映させ、厳格な成績評価を実現しています。
4. 十分な英語理解力を修得した学生を対象に実践的スピーキング・ライティング演習を開講し、発信力修得を支援する取り組みでもあります。発信力評価にはTOEIC-SWテストを使い、世界標準によるレベル評価を行っています。

5. e-LearningシステムアルクNetAcademyを英語の授業に組み込み、教室外学習(主体的学修)を強化し、単位の実質化を図っています。英語講義開始時に毎時間、確認テストを実施し、成績評価に反映させています。繊維学部では実施1ヶ月後、成績不振者(満点の半分以下)へ教務委員が直接指導をしています。NetAcademyは全学の学生が無料で利用できます。

6. 大学院の入学試験にTOEIC公開試験を導入し、高学年次においても学生の学修モチベーションが落ちないように工夫しています（特に工学部）。さらに高年次、大学院の専門分野に直結した英語教育を展開しています。

なぜTOEICなのか

この取り組みはTOEIC受験のためのHow To教育ではありません。技術者としての実践的英語コミュニケーション力の修得が目的であり、TOEICはプログラムの実効性評価、世界基準による成績評価の手段として利用しているだけです。また、スコア値は高年次における学生の学習意欲を継続させるための一つの目標値（指標）として利用されています。

体系的な教育課程の構築が重要

この取り組みのカリキュラムは、年次進行で進めています。1、2年次ではTOEIC500点の実践的英語理解力（リスニング、リーディング）を達成目標とし、高年次(3、4年生)＋大学院では500点を達成した学生を対象とする発信力養成科目を開講しています。



現状は

2016年現在、信州大学では、年間にTOEIC-IPテストを受験している学生がのべ3803人、TOEIC公開テストを受験している学生がのべ791人いました。この数値は、生協の取り扱い分のみであるので、個人的に申し込みをしている学生の人数は把握できていません。特にTOEIC公開テストについては、工学部(2016年度のべ受験人数は322人)、繊維学部(268人)の高年次生が毎年

数多く受験しています。自主的に受験する人も増えてきています。また、何らかの形でTOEIC-IP、公開試験を学部として実施、推奨している所は、理学部、農学部、工学部、繊維学部、経済学部です(研究室単位などの取り組みは除いています)。TOEIC公開試験の公式受験会場には、信州大学上田キャンパスが指定されています。また、2017年4月より、信州大学が賛助会員となり、賛助会員価格が適用されるために、学生一人あたりの受験料が安くなります。信州大学教育学部附属小学校などでも同一法人内でありますので賛助会員価格が適用されます。

分析機器エキスパート(P-DEX)養成事業

繊維学部 小西 哉 教授

P-DEX養成事業とは

P-DEX養成事業は、繊維学部キャンパスにあるサテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー(現在は基盤研究支援センター 機器分析支援部門 上田分室)が保有する分析装置の中から学生自身が学習したい機器を選択し、その機器について操作技能を習得するため学生自らが学習計画を立案し、技能を獲得するという取り組みです。特徴としては、上位の技能レベルを有する学生が下位の学生を指導するというPeer教育(“教えることで学ぶ”)を実践している点です。2006年に組織を立ち上げてからこれまで、120人以上に修了証を授与し、分析機器のエキスパートを養成してきました。2007年度よりP-DEX活動に参加している学生は、繊維学部2・3年生対象の授業「ひと・ものづくりプロジェクトI, II」(通年、自由1単位)に履修登録し、単位取得することが可能となりました。P-DEXの活動で得られたデータを基にした学術論文が学術誌に掲載されるなどの成果を上げています(平成21年度信州大学功労賞受賞)。

平成27年度の活動

平成27年度は10名の学生が3つの班に分かれ、分析機器のエキスパートを目指しました。学生が選んだ装置は下記のとおりです。

- ・走査型電子顕微鏡(SEM)：電子線を用いて微小な表面構造を観察することができる。
- ・液体クロマトグラフ質量分析装置(LC-MS)：液体中の成分を分析することができる。
- ・表面プラズモン共鳴測定装置(SPR)：物質同士の相互作用を測定することができる。

SEM班が6名、LC-MS班が3名、SPR班が1名で活動し、学生が主体的に設定したテーマで活動を行いました。

8月には工学部で開催した「青少年のための科学の祭典」に出展し、SEMで撮影した画像のパズルとサーモグラフィの体験会を実施し、ブースに見学に来た子供たちに科学の面白さを伝えました。

SEMとLC-MSの体験講座を開催し、LC-MS講座に11名(教育学部4名、農学部2名、理学部2名、繊維学部3名)、SEM講座に11名(共通教育4名、教育学部1名、繊維学部6名)の学生が参加しました。

9月には日本顕微鏡学会が主催するSCAN TECH 2015に5名の学生が参加し、最新の技術について学びました。

11月に開催した技能検定では受験したメンバー全員が合格し、初級者は測定原理を理解し分析装置の取り扱いができるようになり、中級者は高度な分析技術を持ち初級者に対して基本指導ができるようになりました。

本事業を通して、学生は自ら設定したテーマに挑戦することで、解決策を見出し、問題発見や解決の能力を高め、独創性溢れる個性豊かな自律した人材に成長することが期待できます。



「青少年のための科学の祭典」に出展したSEMで撮影した画像のパズルを楽しむ子供たち

お知らせ

平成29年度に向けて、高等教育研究センターからのお知らせです。

平成29年度も多様なFDをご提供いたします！

いつもFDへのご理解とご協力、そしてご参加ありがとうございます。来年度も引き続き、アクティブ・ラーニングの推進や学生の主体的学修を促進するための授業デザインやシラバスの書き方などを提供して参りますので、ふるってご利用ください。

また、来年度のFDカンファレンスは、8月24日（木）から25日（金）を予定しております。新任の先生方、そして教養ゼミナールご担当の先生方をはじめ、みまさまのご参加をお待ちしております。よろしくお願いいたします。

『新任教員向けeALPS研修会』を開催します！

4月17日（月）午後の1コマに、新任教員向けの「eALPS研修会」を開きます。（3限および4限の2回開催）松本キャンパスを主会場として各地にも遠隔配信を行うため、各キャンパスで受講できます。新任および初めてeALPSを使ってみようという教員向けに、体験型の研修を行います。ご参加および新任の方のお誘いを、よろしくお願いいたします。

お申込は、<https://goo.gl/I5OQY4> まで、詳細は、e-Learningセンター（elarning@shinshu-u.ac.jp）にお問い合わせください。

平成29年度の調査について

いつも各種調査へのご協力、ありがとうございます。来年度は下記の4つの調査を予定しております。

- ①「新入生調査」（2017年5月22日～6月2日）
- ②「学習時間調査」（2017年12月下旬～2018年1月上旬）
- ③「授業アンケート調査」（2017年7月、2018年1月）
- ④「学部卒業時アンケート」（2018年1月）

ぜひともご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

スタッフからひとこと



“Remember your humanity, and forget the rest.”

核兵器使用の危機を切実に感じていた1955年、ロンドンで出された Russell-Einstein 宣言の一節です。世界終末時計の針は今、この頃とほぼ同じ残り時間を示しています。“rest”ばかりに、執着していないか？****ファーストと聞かたびに、問い直しています。宣言が出された1955年7月9日に、私は生まれました。

（高等教育研究センター教授 矢部 正之）



授業アンケート 全学共通項目とその説明

- ・この授業が掲げた目標に、あなたは到達しましたか。

ねらい： 学修成果の指標として全学で数値を取る

- ・学習を進める上で、シラバスは役に立ちましたか。

ねらい： シラバスを強く意識させる

- ・内容を理解する上で適切な授業外学習が課されましたか。

ねらい： 学修習慣を確立し、能動的な学修姿勢につなげる

- ・この授業のために、あなたは一週間あたりどのくらい授業外で学習しましたか。

1. 30分未満 2. 30分以上1時間未満 3. 1時間以上2時間未満
4. 2時間以上3時間未満 5. 3時間以上

ねらい： 科目ごとの学習時間の数値を全学で取る

- ・この授業に対するあなた態度は良かったですか（欠席をしない、課題等を期限内に提出する、私語・居眠りをしない、質問をするなど、積極的に受講しましたか）。

ねらい： 学びには自分の努力が前提となることを学生に強く意識させる

- ・あなたは、この授業の一連の経験を通して、達成感を得ましたか。

ねらい： （「満足度」ではなく）個々の授業での達成感を聞き、大学全体の教育成果の指標とする

自由記述

- ・この授業を受けて、あなたができるようになったことや学んだことを書いてください。
- ・この授業を受けて、あなたにとってもっとも価値があったもの・ことを書いてください。

二つの自由記述のねらい：

学生が自分自身の学びをポジティブにふりかえるという作業になる
それを読んだ教員がやりがいや達成感を得ることができるものになる

シラバス作成及び今後のシラバス点検に関する説明

加藤善子・加藤鉦三（高等教育研究センター）

4月3日（火）

【全体構想】

「学生が自己効力感を持って卒業していく」ことに全てを収斂させる

そういう社会人はとても強い → 信州大学の教育はとても強い

・シラバスガイドライン抜粋

②授業が担う大学並びに学部・学科等の『学位授与の方針』の項目と、授業の達成目標

授業の達成目標は、この授業が担う『学位授与の方針』の項目をこの授業の言葉で言い換えたものとし、(知識面, スキル面, 態度面の組み合わせで、またはいずれかの面で)「○○ができるようになる」という形を標準とする。

③成績評価の方法

受講者が②の達成目標に到達するために通っていく過程(課題や小試験等)と、到達したことを示すエビデンス(最終レポートや期末試験等)のそれぞれの内容と配点を記述する。

④成績評価の基準

この項では、「何ができていれば、授業の達成目標の水準から見て『卓越している』／『かなり上にある』／『やや上にある』／『その水準にある』』と言えるのかを記述する。

・授業アンケート共通項目

2. この授業が掲げた目標に、あなたは到達しましたか。

1. 強くそう思う 2. そう思う 3. どちらでもない 4. そう思わない 5. 全くそう思わない

7. あなたは、この授業の一連の経験を通して、達成感を得ましたか。

1. 強くそう思う 2. そう思う 3. どちらでもない 4. そう思わない 5. 全くそう思わない

【ねらっていること】

授業目標への到達度で成績評価

授業目標への到達度＝授業でねらっている**学習成果**

授業目標への到達度＝成績

⇒ **成績＝学習成果** ⇒ GPA＝学習成果の指標

授業目標への到達度を学生が自分でふりかえる

達成感を学生が自分で確認する

15回の授業で適度な負荷をかけられる

努力により一山超える(超えられるように授業がデザインされている)

⇒ **適正な達成感** ⇒ 小さな成功を授業の数だけ体験 ⇒ 自己効力感

【そのために必要なこと】

・授業目標が適切であること

分野	教育	研究	社会活動	大学運営	計
重み設定					0.0

【注意】

当該年度(教育, 社会活動, 大学運営は平成26年度と27年度, 研究は平成23年度から27年度の5年間)の全ての業績を申告してください。

ただし, 科研費申請及びSOAR更新は, 28年度を適用します。

科研費申請済, 継続及び資格停止申請済は, 枠内に「1」を, ない場合は「0」を入力 H27.11.1~H28.8.31でSOAR更新済は, 枠内に「1」を, ない場合は「0」を入力

I:教育 対象期間:H26年度~H27年度(2014年4月~2016年3月)

審査項目	学士 or 修士 or 博士	前期 or 後期 or 通年	授業分担割合 (~1)	授業科目名	コマ数	自己算定点	審査委員会チェック欄	審査委員会査定点
H26年度授業科目								
H27年度授業科目								
H26年度授業以外の教育実績	教育活動内容	貢献度 大・普通・小	担当教員数	活動期間・時間等 (and/or 対象学生数)		自己申告点	審査委員会チェック欄	審査委員会査定点
			人					
H27年度授業以外の教育実績	教育活動内容	貢献度 大・普通・小	担当教員数	活動期間・時間等 (and/or 対象学生数)		自己申告点	審査委員会チェック欄	審査委員会査定点
			人					
教育の質-目標達成事項 H26年度からH27年度にかけて, 大学院, 学部, 全学教育の教育目標を実現するために, 各授業科目につき, どのような努力を行い, どのような成果を挙げることができたか, 下記(A)~(C)のうち成果を挙げたものを3授業科目挙げ, それぞれの授業ごとに証拠に基づいて述べ, そのために取り組んだ授業実践を記述する。 (A)授業に対する学生の授業参加度(出席・遅刻・早退などの改善, 居眠り・私語・内職などの改善, 集中力・発言・グループワーク参加などの向上, 予習・復習の増加, 課題提出率の向上など) (B)一学期の授業の結果としての学生の知識・思考・技術の深まりや修得の程度(レポートの質の向上, 成績の上昇, 単位取得率の上昇(=途中放棄率の減少)など) (C)学生の満足度(授業アンケート結果, それ以外の学生からのフィードバックなど) 《上限18点》	担当科目名	受講者数	目標達成項目	取り組んだ授業実践の内容		自己算定点	審査委員会チェック欄	審査委員会査定点
			(A)授業参加度					
			(B)修得の程度					
			(C)満足度					
教育の質-FD項目 H26年度からH27年度にかけて, 大学院, 学部, 全学教育の授業改善を達成するために, どのような努力を行い, どのような成果を挙げることができたか(ピアレビュー等の活動内容は日時・参加人数等をできるだけ明確に記述すること。 (A)学内・学外のFD活動への参加, 企画・運営 (B)教育関係の学会などへの参加・発表 (C)ピアレビュー(レビュワーとレビューイ双方が参加する①事前打ち合わせ, ②授業レビュー, ③事後フィードバック・省察を含む) (D)その他(個人的なコンサルテーション申し込み, 関係図書参照, 同僚との懇談など) 《上限10点》	左記(A)~(D)のFD項目	場所・日時や期間	具体的な取り組み内容		自己算定点	審査委員会チェック欄	審査委員会査定点	
教育の質-その他参考特記事項 《上限28点》								
教育分野	計					0.00		0.00

Ⅱ:研究 対象期間:H23年度~H27年度(2011年4月~2016年3月)

審査項目		著書名	共著の場合の分担者数	担当頁数	刊行先	刊行年月	自己算定点	審査委員会チェック欄	審査委員会査定点	
著書 (専門研究書)	著書(専門研究書)-単著									
	編共著(専門研究書)-編者									
	編共著(専門研究書)-共著									
	研究教育関連教科書等-単著									
	研究教育関連教科書等-編者									
	研究教育関連教科書等-共著									
審査項目		論文名	共著の場合の分担者数	担当頁数	掲載雑誌名	刊行年月	自己算定点	審査委員会チェック欄	審査委員会査定点	
論文	論文(専門研究論文)-単著									
	論文(専門研究論文)-共著									
	しかるべき評価又は権威ある機関等の査読を経た論文(専門研究論文)-単著(2倍算定)									
	著しい評価又は権威ある機関等の表彰を経た論文(専門研究論文)-単著(3倍算定)									
	しかるべき評価又は権威ある機関等の査読を経た論文(専門研究論文)-共著(2倍算定)									
	著しい評価又は権威ある機関等の表彰を経た論文(専門研究論文)-共著(3倍算定)									
審査項目		発表名等	単著 or 共著	会議名	会議場所	会議年月	自己算定点	審査委員会チェック欄	審査委員会査定点	
会議・学会発表等	国際の場合は「際」国内の場合は「内」と記入									
	会議・学会における招待講演									
	研究発表・症例報告									
	共同発表									
その他学術・研究活動、貢献等	研究者受入	研究者名	国籍	受入期間	受入月数		自己算定点	審査委員会チェック欄	審査委員会査定点	
	科研費申請(単独・共同)	研究種目	研究課題			申請年度	自己算定点	審査委員会チェック欄	審査委員会査定点	
	科研費採択(単独)	研究種目	研究課題	分科細目番号	分担者数	交付年度	交付額(万円)	自己算定点	審査委員会チェック欄	審査委員会査定点
	科研費採択(共同)									
	科研費採択(共同かつ研究代表者)									
	その他研究費採択(単独)	交付機関等名	研究課題	相当する分科細目番号	分担者数	交付年度	交付額(万円)	自己算定点	審査委員会チェック欄	審査委員会査定点
	その他研究費採択(共同)									
	その他研究費採択(共同かつ研究代表者)									
	寄附金	H23年度受入金額(万円)		万円						
		H24年度受入金額(万円)		万円						
H25年度受入金額(万円)			万円							
H26年度受入金額(万円)			万円							
H27年度受入金額(万円)			万円							
特許		H23年度出願件数		件						
	H24年度出願件数		件							
	H25年度出願件数		件							
	H26年度出願件数		件							
	H27年度出願件数		件							
	H23年度取得件数		件							
	H24年度取得件数		件							
	H25年度取得件数		件							
H26年度取得件数		件								
H27年度取得件数		件								
研究の質-上記各項目から漏れたり十分評価されないもの及び強調したい研究成果について、特記事項として、客観的根拠を示して記述(少なくとも1件、最大3件)										
研究分野							計	0.00	0.00	

Ⅲ：社会活動 対象期間：H26年度～H27年度(2014年4月～2016年3月)

審査項目	学会等名	国際の場合は「際」、国内の場合は「内」と記入	役職名	役職就任期間	対象期間 就任月数	自己算 定 点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定 点	
学会等	学会運営活動(学会長・代表)								
	学会運営活動(その他役員)								
	学会運営活動(学会誌編集委員)								
	学会運営活動(大会実行委員長)								
	学会運営活動(大会実行委員)								
	地方部会・研究会運営活動(部会長・代表)								
	地方部会・研究会運営活動(その他役員)								
	地方部会・研究会運営活動(会誌等編集委員)								
	地方部会・研究会運営活動(大会実行委員長)								
	地方部会・研究会運営活動(大会実行委員)								
政府等審議会等	審議会等名			役職名	役職就任期間	対象期間 就任月数	自己算 定 点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定 点
	中央行政機関審議会(会長)								
	中央行政機関審議会(委員)								
	都道府県行政機関審議会(会長)								
	都道府県行政機関審議会(委員)								
	市町村行政機関審議会(会長)								
	市町村行政機関審議会(委員)								
大学外の公的試験の出題・採点・面接等の試験委員の業務 ※大学入試センター教科科目第一委員会、司法試験委員その他これに準ずる者の委員名の秘匿期間を経過した直後の年度で、その業務活動を算定する。	活動内容			活動時期	活動量 (大・普通・小)	自己申告 点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定 点	
省庁等が公募する特別な事業(JSTからの事業公募の審査、科学研究費補助金)の試験委員の業務 ※委員名の秘匿期間を経過した直後の年度で、その業務活動を算定する。	活動内容			活動時期	活動量 (大・普通・小)	自己申告 点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定 点	
地域連携・産学官連携	連携活動内容			活動時期	活動量 (大・普通・小)	自己申告 点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定 点	
地域連携・産学官連携に伴う講演・講義等(出前講座等)	講演・講義題目等			時期	活動量 (大・普通・小)	自己申告 点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定 点	
国際交流活動	活動内容			活動時期	活動量 (大・普通・小)	自己申告 点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定 点	
その他社会活動	種別	活動内容		活動時期	活動量 (大・普通・小)	自己申告 点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定 点	
					社会活動分野	計	0.00		0.00

Ⅳ：大学運営 対象期間：H26年度～H27年度(2014年4月～2016年3月)

審査項目	役職名	就任期間	対象期間 就任月数	自己申告 点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定 点			
役職等									
全学委員会	委員会等名	委員長、委員等 種別	就任期間	対象期間 就任月数	活動量 (大・普通・小)	自己申告 点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定 点	
センター内委員会	委員会等名	委員長、委員等 種別	就任期間	対象期間 就任月数	活動量 (大・普通・小)	自己申告 点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定 点	
センター規程に掲げられている業務に関し、I(教育)からⅢ(社会貢献)の分野で直接評価できない業務について、その取組状況及び成果を自己申告(具体的成果を客観的に記述してください。)									
					大学運営分野	計	0.00		0.00

	教育	研究	社会活動	大学運営	科研費申請	SOAR	部局長調整	計
審査点(加重前)	0.0	0.0	0.0	0.0	G13確認	O13確認	—	0.0
審査点(加重後)					G13確認	O13確認		0.0

- ・受講生にかけられる負荷が適切であること（難しすぎない，楽勝科目でない）
- ・受講生が努力すること

【そのための措置】

授業は教員の事実上の聖域であった

→ 29年度に行うシラバス点検では授業内容に踏み込むことになる

「成績評価の基準」について **3年計画** で浸透を図る

28年度に行う 29年度用シラバスの点検のテーマ
『いつ、何で、何点つけるか』が明記されている」

29年度に行う 30年度用シラバスの点検のテーマ
『いつ、何で、何点つけるか』のそれぞれについて、授業目標のうちどの部分に関係づけられており、受講生の何を見るのかが明記されている」

30年度に行う 31年度用シラバスの点検のテーマ
「授業目標の部分部分を受講生がいつどのような過程を経て達成するかが明記されている」

【シラバスの目的】

- ・学生がシラバスを見て、この授業がどういう授業であり、何を求められており、何がどういうふうになれるようになれば何点もらえるのか、が分かるようにする。
 - ⇒ そのために、シラバス執筆にあたって、次の2点をまず考える
 - ・この授業での目標を達成するために、**学生にどのような努力をしてほしいのか**をはっきりさせる
 - ・こちらが望む努力を、学生が間違いなく行わざるを得ないような**評価構造**を考える

【シラバス点検の方針】

- ・摘発・検閲が目的ではない
- ・教員の理念的な部分は点検の対象とせず、受講生にとって必要にして有益な情報が書かれているかどうか、という部分を点検対象とする。

【シラバス点検作業の観点】

- (1) 受講生が、何ができるようになればいいのかがイメージできるか？
- (2) 授業を受けるための前提（既習科目や必要とする最低限の知識やスキル等）が書かれているか？
- (3) 学生が、どのような努力をすれば単位が取れるのかが書いてあるか？
例：「この授業は遅刻できない」「この授業は読書課題が多い」「人と交流しなければ単位が取れない」
- (4) 学生がすべき準備の時間量や中間試験，期末試験，学外実習の日程や経費等が書かれているか？

平成29年 4月 1日

平成29年度新任教員研修対象者 各位

e-Learning センター長
高等教育研究センター長 平野 吉直

新任教員向け eALPS 研修会について（通知）

下記のとおり、新任教員向けに「eALPS 研修会」を開催いたします。本研修会は、これまで e-Learning センターが実施してまいりました信州大学全学教育基盤システム「eALPS」（授業支援 Web システム）の講習会等を、高等教育研究センターと共同で実施する FD と位置付け、新任教員向けに、教育における情報通信技術（ICT）の活用能力を高めていただく目的で実施するものです。

つきましては、ご多忙の折とは存じますが是非ともご参加いただければ幸いに存じます。お申込みは、お手数ですが4月10日（月）までに申し込みフォームからご連絡ください。

記

日 時： 平成29年4月17日（月）3限（13時00分～14時30分）
4限（14時40分～16時10分）

※同じ内容で2度行いますので、どちらか都合の良い方にご参加ください。

場 所： 松本キャンパス 旭会館3階 SUNS 会議室（主会場）

※以下のとおり SUNS 配信を行いますので、各地学部から遠隔参加も可能です。

教育学部：中校舎1階第2会議室 工学部：総合研究棟1階 SUNS 会議室

繊維学部：事務棟2階中会議室 農学部：SUNS 会議室（図書館横）

対 象： 新任教員 および 初めて eALPS をお使いの方

内 容： eALPS の機能と活用事例を紹介し、実際に授業のコースにログインして体験していただきます。個別相談にも対応いたします。

※無線 LAN に接続可能なノートパソコンをご用意いただき、人事より発行されている**業務用 ID**とパスワードを忘れずに控えてきてください。

講 師： 矢部 正之（高等教育研究センター・e-Learning センター）

谷塚 光典・新村 正明・東原 義訓・長谷川 理（e-Learning センター）

申込み： 以下の申し込みフォームから送信

<https://goo.gl/I50QY4>

なお、本講習会の出席者には「FD 参加証」が交付されます。

本件事務連絡先

学務課教務グループ 遠藤・佐伯

電 話：0263-37-2427（内線）811-7165

e-Learningセンター 早水・内山

電 話：026-238-4247（内線）831-4247

e-mail：elearning@shinshu-u.ac.jp